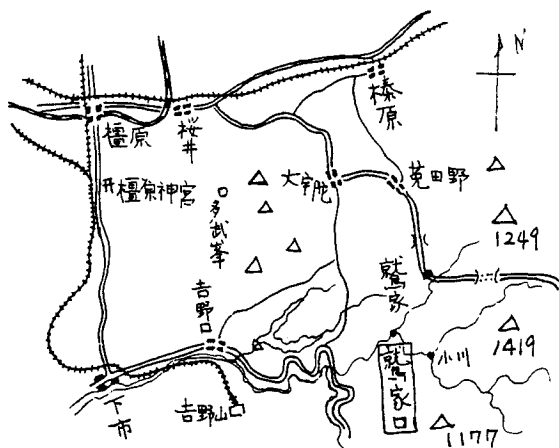


日本狼の最後の舞台、鷺家口

それではアメリカ人、マルコム・アンダーソンが大和の鷺家口で、日本最後の記録になった狼を得た話を少し詳しくいたしましょう。

アンダーソンは、鷺家口に來たとき26歳になろうという青年動物学者でした。大学を出て間もなく、イギリスのベッドフォード侯という大金持ちから

「東洋で哺乳動物を集めてほしい」と望まれ、同侯のいわゆる動物学探險のために來朝しました。東北地方を廻ったあと、1905年、つまり明治38年の1月、狩猟免状の交付を受けるため奈良に立ち寄り、ここで種々の動物を集めるにはどこがよいか、と相談しました。鷺家口あたりは獣が一ばんよく集まるところだ、と教えられ桜井經由で出かけました。桜井では皆花楼^{かいか}に泊っています。私もその宿を見に行きました。火災にあったため規模がアンダーソン当時の半分になっていましたが、古い部屋がまだ残っていました。彼はその翌日鷺家口に着いたのです。1月13日のことでした。ここは鷺家川の谷の口に沿った戸数200ばかり、町の端から端まで500メートルくらいの小さい町です。今は東吉野村小川となって、鷺家口というなつかしい呼名は、奈良交通のバス停留所名と警察官の駐在所名とに残るばかりです。アンダーソンはここで芳月楼という宿に入りました。宿の主人は前北丈太郎という人でしたが、いまは家も人手に渡り、建て変わっているし、当時のことを知った人もいません。ところが裏隣に住んでいた上谷万吉さんという老人があることを知りまし



話」にあるように、狼の大群が北へ移動したが、その後、遠野地方に狼が目に見えて少なくなった、という話などはなかなか、面白く読まれます。みな津軽海峽に突っ込んでしまったわけではないでしょうが、いまは全くないようです。柳田先生の狼のお話は、『孤猿隨筆』という本の中にまとめてありますし、『定本柳田国男集』中にも収められています。今日の話の題の「ゆくえ」も柳田先生の文から借用しました。

北海道にも明治のはじめまで、たくさん狼がいました。シベリア狼と同系で、内地の狼、つまり日本狼とは別種なのですが、これは自然に絶えたのではなく、人間が殺してしまったのです。狼による家畜の被害が余りに大きかったので、当事者が彼らを全滅させる方針を決め、毒薬で絶滅させました。全く見なくなったのは明治22年ごろのことです。いまなら2組か3組の狼のつがいはどこかで保護して、子孫を残させてでしょうが、絶滅させてしまっただけなら悔んでも追いつきません。札幌市の北大博物館に剝製があるだけで、まことに遺憾なことでもあります。北海道狼はここにある日本狼、カニス・ホドヒラックスよりも大形でした。自然保護はつねに、かなり先のことを考えて実行すべきで、1匹狼になってしまっただけでは処置なしです。

話は変わりますが、先ごろ必要があって、徳川三代将軍家光の実紀、つまり、主に將軍職の間の日記から、動物に関する記事を書き出しましたところ、家光が33歳の血気さかんころには月に4〜5回も墨東、葛飾その他に狩猟に出かけています。そして夥しいツルや白鳥を獲っていますが、狼の記録は見当りません。同じように八代將軍吉宗の実紀を見ますと、江戸の東の小金ヶ原で1日にイノシシ11頭、シカ470頭を獲っていますが、そのうちに狼が1匹あります。これを見ると、いまの東京近郊にはかなりの野鳥や野獣がいたようですが、鹿が500頭近くも獲れているのに、狼はただの1匹しか獲れていません。狼は打ちとめにくかったのかも知れませんが、草食獣と肉食獣との習性のちがいはありましようが、そのころでも狼の密度はたいへん小さかったとも想像されまます。人間の心の中に根強く住みついていたほど、狼は山野にみちみちていたわけではなかったのではないかとも思われるのです。